

May 1998

文字百景

活字に憑かれた男たち(二)
變體活字廢棄運動と志茂太郎
片塩二郎

robundo publishing

058

志茂太郎は吠えた――。

「名を国策にかり、オタメゴカシのインチキ題目を振りかざし、時局をカサに私利・私欲をほし
いままにせんとする火事場泥棒の『変体活字廃棄運動』こそ、最も非国策的にして、最も非時局
的である。しかもあわよくば時のいきおいに乗り、強権のカゲにかくれて私欲をとげんと企むが
ごときにいたっては、天人ともに許さざる極悪非道のおこないである」

怒り心頭に発して怒髪天をつく、凄まじいばかりの文章を『書窓 六二号』（昭和一六年一月アオ
イ書房）に発表したのが志茂太郎でした。

この檄文は出版・印刷界にとつて衝撃的な話題になりました。しかし志茂は国策に反する危険
人物として官憲につきまとわれ、やがて経営していたアオイ書房は閉鎖を命じられて、ついには
強制疎開によって郷里岡山への引きあげを余儀なくされたのです。

この国の活字の歴史を追っていると、看過することができない事件として「官製の国民運動／変
体活字廃棄（止）運動」に突きあたります。当時の漢字では、よりおどろおどろした「變體活字廢
棄運動」になります。

戦争協力の美名と印刷活字の処分

昭和一二年八月、日中戦争は華北での戦闘から、上海などの華中へと戦線が拡大してついに日

中全面戦争に突入します。そのために物資と精神の両面から国民の戦争協力体制をつくることが
政府・軍部の切迫した課題となり「国民精神総動員実施要綱」を閣議決定しました。

その実施要綱には、国民が「挙国一致・尽忠報国・堅忍持久」の精神を堅持して、非常時財政
経済に協力することが求められました。運動の実施は内閣情報委員会が中心となって、各省総が
かりであたることとされました。

当時の活字やその母型にとつて不幸だったのは、支持母材が鉛・銅・真鍮などの非鉄金属だっ
たことでした。日中戦争の勃発から太平洋戦争への予感のなかで、これらの非鉄金属の価格は高
騰して、天井知らずのヤミ価格で取引きされるようになっていました。

余談ながら昭和四〇年代、ベトナム戦争が熾烈に展開していたころに、この国で突如「鉛公
害」が声高に語られたことがあります。

「作業の前後に手洗いの励行」とか「マスクをして粉塵を吸わないようにしましょう」といった
指導が保健所や組合からなされました。その昔遊女が短命だったのは、白粉おしろいに含まれた鉛のせい
だったと、したり顔で語る老人もあらわれました。

そのころの活字植字工は、マゴマゴすれば活字をくわえて作業をしていました。連日の新聞記
事には半信半疑でしたが次々に報道される「鉛公害」の情報に動揺して、組合も対応におわれま
した。しかし結局のところどうすることもかなわず、また周辺住民の視線も厳しくなって、新興
の写真技法による文字組版に切り替えたり、転廃業に追い込まれていきました。

このころの活字の地金は一キロあたり六百円、瞬間的には千円まで高騰しました。ベトナム戦争の影響がなかったとはいえません。こうしたなかで多くの活字版印刷業者は事業欲を喪失して、高値で活字を売却して転業していったのです。

こうして昭和四〇年代にはより一層加速度をまして、金属活字版印刷はどの国よりも早いテンポ凋落していきました。

しかしいまでも金属活字による印刷はなくなった訳ではありません。ところがそこで発生するメツ活字（使用して磨耗した活字）はあまりの安値のために回収するものがなく、おおかたは内緒で不燃ゴミとして処分しているのが実情です。いまま職人はときどき活字をくわえて作業におわれていますが、もはや保健所からの指導はありませんし、鉛地金はキロあたり三十円から十円程度の低額で取引されています。

たしかに鉛を含めてすべての金属は、大なり小なり人体に害をもたらします。しかしベトナム戦争に歩調を合わせるように展開した、この国の金属活字を襲った鉛公害騒動とはなんだったのか……とふりかえることがあります。

それに代わった写真植字法では、化学処理の工程で硝酸銀というより危険な重金属をもちいています。しかしその公害対策が問われることはあまりなかったのです。そしてついにベトナム戦争が活字にあたえた影響はどこにも記録されることはありませんでした。

余談が長くなりました。いずれにせよ昭和初期には「泣く子と地頭にや勝てない」に代わって

「星と錨と顔と鬨」という俚諺がひそかに語られました。それは何事も尊大に壘断ろうだんする陸・海軍の軍人や、町の顔役・横行するヤミ商人たちを揶揄したのですが、この時代にもこうした俚諺があつて、懼れられていたことは記憶したほうがいかもしれません。

統制と新体制ということばが流行して、業種ごとの組合づくりも積極的にすすめられました。

活字用の鉛には「日本故銅統制会社」が東京築地活版製造所の跡地に設けられて、公定価格の設定などにあたりました。

鉛地金の入手が困難になるとメツ活字を業界内で循環利用する動きがでてきます。いわゆる「故鉛リンク制」で、その主唱者は活字込物から活字鑄造に転じたばかりの、二葉商会・木村房次でした。しかしこの人はその提唱の直後に赤紙一枚で戦地に駆りだされました。

新地金の配給が減少したのをうけて「活字共同鑄造所」の開設を訴えたのは藤村悌次でした。しかし藤村が『印刷雑誌 昭和一六年四月号』に論文を発表すると、ただちに「遺憾の点が多々ある」として「日本故銅統制会社」から編集者ともども「出頭」を命じられました。そしてその後の発言はすくんだようにみられなくなります。

どこかみえない、黒くておおきな手が動き始めていたのが、昭和一二年から一五年の印刷界だったのです。

まことに皮肉なことですが書籍形成法（タイポグラフィ）の見地からいうと、多色刷りのオフセット印刷をのぞけば、この時代の印刷技術は歴史上もっとも充実して、業界の意欲も高揚していま

した。悲しいことにこの国の印刷も日清戦争・日露戦争そして日中戦争を引き金として飛躍をとげた側面は無視できません。

活字は金属活字の全盛期で、本文用書体は成熟して揺らぎのないものでした。書体の数もふりかえってみれば決して少なかったわけではありません。書籍も円本時代の混乱を脱して、堅牢で落ち着きのある装いになっていました。

タイポグラフィは明治・大正の移入期からすでに十分に消化されて、この国独自の書物が妍を競っていました。

ライベート・プレスの運動も、なにも欧州だけで展開したわけではありません。このころには、アオイ書房・ボン書店などの個人印刷所や、江川書房・野田書房・やぼんな書房などの意欲にとんだ個人出版社が誕生して、記憶に残る書物を造っていました。

黄金の昭和初期、そして戦火のなかに消えた書物

とところでここ数年、どういう訳かこの国の昭和初期のタイポグラフィにこだわっています。もともとの伝統様式と、海外からもたらされたモダンやダダやシュールといった芸術潮流とが、なにかもが慌ただしく混乱して、煮えたぎる坩堝くわがのように燃え盛っていた時代、そして小さな民族主義や皇国史観がこの国を覆うまでの、魅力に富んだ昭和初期についてです。

とりわけ稀代の趣味人・志茂太郎が、装本に恩地孝四郎を得て設立したアオイ書房は、愛書誌『書窓』や、数々の美しい書物を残しました。

このアオイ書房を追っているうちに、いつのまにか敗戦までの活字を追うことになったのは、必ずしも本意ではなかったのです……。

威勢のよい啖呵をきる志茂太郎ですが、この人は岡山県久米南町山くみなんしょうまのじょうの城の酒造家志茂猶太郎なほたろうの長男として明治三三年八月二三日に生まれ、東洋大学に学んだひとです。

昭和四年に中野区新井町五九四（現在新井一九）に酒販店「伊勢元」を開設し、そのかたわら「アオイ書房」を興して、出版に手を染めるようになります。

ついでながら「アオイ書房」とは、山の城の広大な邸内に自生する野草から名付けられました。この野草は正確には「とろろあおい」という一年生の野草で、晩夏のころにおおきな淡黄色の花をつけます。またその根はいまも和紙の製造に欠かせない材料です。

志茂はこの花がとても好きで、前川千帆・武井武雄・川上澄生といった親しい版画家によく描かせていました。しかし戦争中に「社名がカタカナで贅沢だ」として何かと官憲の介入を招いたために、発行人を長男・明の名前にかえたり、所在地を荻窪の恩地邸にするなどしました。しかし官憲の許すところではなくついに昭和一七年不本意ながら「日本愛書会」と名称をかえました。戦後には併設して「日本書票協会」を設立して、この会だけが今日まで継承されています。

また余談が長くなりました。ところで志茂の経歴をみる限り、印刷や出版を本格的に勉強した

とは思えません。しかし志茂は子供のころからの活字・印刷のマニアであり、終生いい意味での印刷・出版の素人であり続けました。

志茂が出版、それもとびきりの美本づくりに没頭していったのは、郷土の先輩画家であった竹久夢二と、イギリスの工芸運動家ウィリアム・モリスの影響がおおきかったようです。

抒情画家として知られる竹久夢二のもうひとつの顔に書籍形成家(タイポグラフィ)があります。この人も書物にこだわりのつよい人でした。そのスタジオは「どんたく図案社」とよばれ、その協力者に恩地孝四郎がいました。

志茂と恩地は竹久夢二への傾頭という共通項において手を携えて昭和一〇年四月愛書誌『書窓』を刊行するようになります。志茂は「筆書に代えて活字を組み、印刷を以てする」と記した人であり、膨大な記録を残した人でもありました。

『書窓』創刊号・雑用手帖

「書窓」は読む雑誌であると同時に、眺めて楽しく、美しい雑誌たらしむべく、視覚効果を高めるために、活字の選択から紙質・印刷には費用を惜しむものではありません。そのすぐれた印刷と、雅味に富んだ装本は他誌の追隨を許さぬものです。アオイ書房は純粹にわたしの道楽であり、本を作って儲けようなどと、一度も考えたことはありません。

(志茂太郎)

07

「書窓」をして願くば読書人の心おきな欵談の部屋として、うち寛げるようにしたいと願って

058

いる。わたしは今まで本的美術領域に従事してきたので、その方面に微力をつくしたい。刊行者の志茂氏は美書をうむのにおおらわの奇人である。心強いかぎりである。

(恩地孝四郎)

08

じつはアオイ書房の最初の刊行物は徳川夢声のエッセイで、無声映画の弁士時代の体験をつづった『くらがり二十年』は軽妙洒脱な語りくちがうけました。

この書物はセピア色の特色インクで本文が印刷され、洋紙のアンカットという大胆な装本とあいまって、三三刷り、数万部の発行となりました。

この「夢声アカ本」につづいて、ナス紺インクによる「夢声アオ本」つまり『閑散無双』を刊行したところこれも大人気になりました。

ところが売れたことが不満につながったのですから、この人の「つむじ曲り」は相当なものだったでしょう。

「所詮酒屋のオヤジの余技、それが何万部も売れるとは不気味だ」

と志茂は記しています。つまり志茂は売本出版ではなくて個人的な印刷と出版を志していたのであり、ベストセラーはかれの美意識に反していたのでしよう。

つまるところ、志茂はウィリアム・モリスらの個人印刷所を参考にしつつ、ボン書店・野田書房・江川書房・やぼんな書房といった、この国の小出版社の試みがついえたあとを担うことになりました。

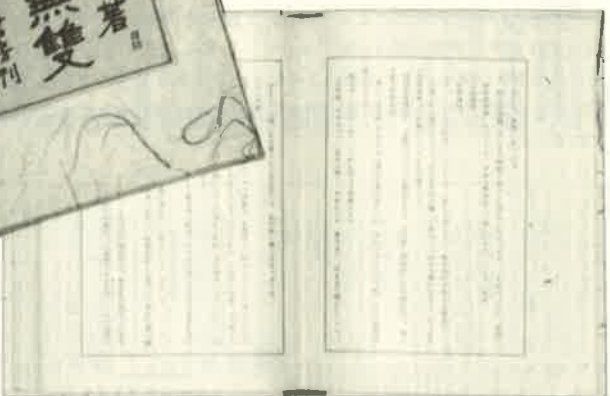
058



右：晩年の志茂太郎。若い頃の精悍さは姿を消していますが、着物を小粋に着こなしたり、青いシャツに青いネクタイと最後までダンディな人だったといえます。
 下：疎開の際に持ち帰った記念の品です。中野ブロードウェイ商店街をでた早稲田通りに富士銀行がありますが、伊勢元酒店はこの辺りを占めていました。商人としての志茂の商才は若干疑わしいものがあると家人は笑って話します。

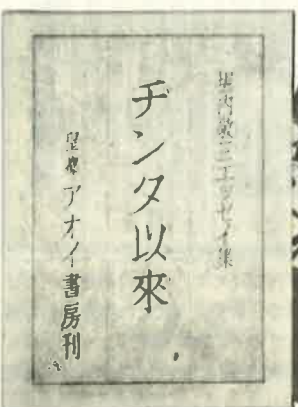
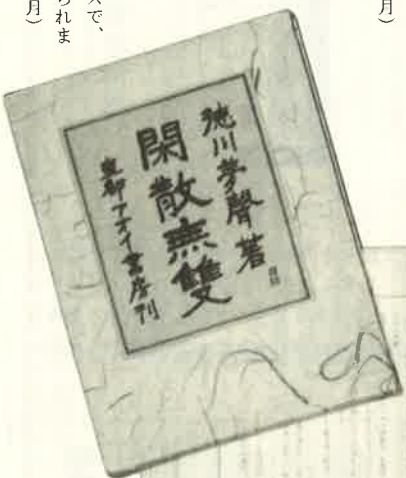


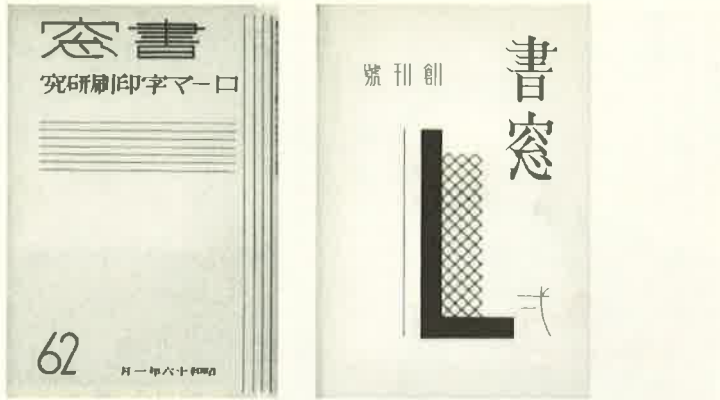
アオイ書房初期の書物で天と小口は断裁されていません。刷り色はセピアの特色インクです。(昭和九年三月)



津田三省堂宋朝活字を東京で使ったのは志茂が最初の人と思われれます。活字好きの志茂はこの活字にこだわりがあって、名古屋まで活字を買いに出掛けましたし、活字も現存しています。

徳川無声のシリーズで、ナス紺インクで刷られました。(昭和九年七月)





志茂と恩地の同志的結合によって造られた愛書誌『書窓』は冊子本29冊、枚葉紙74枚とされますが正確な数は分明しません。なにしろサイズ・ページ数もバラバラで通し番号もあいまいです。手紙のようなものまでありますので……。また紙も印刷方式もさまざまで文字組版は金属活字・写植・タイプ清打ちと壮大な印刷実験も展開していました。

變體活字廢止問題登場

東印規格委員會東京活版工組決議す

東京活版工組は、東京印刷規格委員會の決議に賛同し、變體活字の廢止を主張する。この決議は、東京活版工組の代表者によるもので、東京印刷規格委員會の決議とは異なる。東京印刷規格委員會は、變體活字の廢止を主張するが、東京活版工組は、變體活字の廢止を主張しない。東京印刷規格委員會は、變體活字の廢止を主張するが、東京活版工組は、變體活字の廢止を主張しない。

東京印刷規格委員會は、變體活字の廢止を主張するが、東京活版工組は、變體活字の廢止を主張しない。東京印刷規格委員會は、變體活字の廢止を主張するが、東京活版工組は、變體活字の廢止を主張しない。

邦文活字の體及規格一覽表

龍宋活字

新發賣龍宋體
春頌舞新發賣
用途萬能ペン字の味
未だ前てなき清新の書風は
近代活字に於て上りな書版にて

邦字印刷の始

長崎の日本人木島造氏
和蘭に就きて始めて歐洲
歐洲式の活版術を明治元年東洋
に傳へて日本に活版術の種子を
播きたる事にして其の功績は
大なるものあり

新書體

陸續出現
文久元年幕
が始めて使節を米國
に派遣せるに當り其一
小栗忠順は、新國體の本體に
對し、國體に於ては、活版術の
改良を主張し、活版術の改良
を主張し、活版術の改良を主張し、

我國出版事業

は徳川時代於
に足る可き發達
に達せたり是幕府
の刊行を獎勵した結
果也就中幕府が昌平
費に命じて翻刻せし
支那古典及史籍は其製本
印刷及び紙質の精美なる
原書に優り益々著者愛重
する所也所謂官版なるもの足
る以外に塾問及び水戸家金
工徳島及津藩等の藩版にして特に
水戸藩の出版が著るは餘は庶
に著るにして是、徳川活版術の

印刷機械材料

新活字正楷
春頌福恭見舞
漢文正楷書新發賣
上品なる者風趣味の印刷
物も書籍出版等に用ひ最大
の功を奏せしむる者なり
新活字印刷用各型活字の翻出は
新活字印刷用各型活字の翻出は

文運の進歩

奉祝恭禧同喜
向上は益々隆盛也
幕府活版術の改良は、活版術
の改良は、活版術の改良は、活
版術の改良は、活版術の改良は、

印刷美

効果満點
徳川時代の
印刷美は其當初
の如き手版に於て不完
全とは言へず其當時の時勢に
對しては、幕府の發令を迅速に
履行せしむるに力を用ひ、活
版術の改良は、活版術の改良は、

萬般書體完備

堂文龍川森

大阪・森川龍文堂の大判(A2)の活字見本です。龍宋活字を新発売としていますので昭和11年から15年頃の製作と推定されます。3・4段目に見られる宋朝体は津田三省堂のもので委託販売をしていたとみられます。3段目右側にあるルビ付き明朝体に注目してください。この膨大な活字は戦後復活しませんでした。同社は戦後岩田母型製造所の大阪販売店となりましたが、ここに見る活字群はどこに消えたのでしょうか。

見本印刷用活字の大きさは、大判A2用、小判A1用、小判A2用、小判A3用、小判A4用、小判A5用、小判A6用、小判A7用、小判A8用、小判A9用、小判A10用、小判A11用、小判A12用、小判A13用、小判A14用、小判A15用、小判A16用、小判A17用、小判A18用、小判A19用、小判A20用、小判A21用、小判A22用、小判A23用、小判A24用、小判A25用、小判A26用、小判A27用、小判A28用、小判A29用、小判A30用、小判A31用、小判A32用、小判A33用、小判A34用、小判A35用、小判A36用、小判A37用、小判A38用、小判A39用、小判A40用、小判A41用、小判A42用、小判A43用、小判A44用、小判A45用、小判A46用、小判A47用、小判A48用、小判A49用、小判A50用、小判A51用、小判A52用、小判A53用、小判A54用、小判A55用、小判A56用、小判A57用、小判A58用、小判A59用、小判A60用、小判A61用、小判A62用、小判A63用、小判A64用、小判A65用、小判A66用、小判A67用、小判A68用、小判A69用、小判A70用、小判A71用、小判A72用、小判A73用、小判A74用、小判A75用、小判A76用、小判A77用、小判A78用、小判A79用、小判A80用、小判A81用、小判A82用、小判A83用、小判A84用、小判A85用、小判A86用、小判A87用、小判A88用、小判A89用、小判A90用、小判A91用、小判A92用、小判A93用、小判A94用、小判A95用、小判A96用、小判A97用、小判A98用、小判A99用、小判A100用、小判A101用、小判A102用、小判A103用、小判A104用、小判A105用、小判A106用、小判A107用、小判A108用、小判A109用、小判A110用、小判A111用、小判A112用、小判A113用、小判A114用、小判A115用、小判A116用、小判A117用、小判A118用、小判A119用、小判A120用、小判A121用、小判A122用、小判A123用、小判A124用、小判A125用、小判A126用、小判A127用、小判A128用、小判A129用、小判A130用、小判A131用、小判A132用、小判A133用、小判A134用、小判A135用、小判A136用、小判A137用、小判A138用、小判A139用、小判A140用、小判A141用、小判A142用、小判A143用、小判A144用、小判A145用、小判A146用、小判A147用、小判A148用、小判A149用、小判A150用、小判A151用、小判A152用、小判A153用、小判A154用、小判A155用、小判A156用、小判A157用、小判A158用、小判A159用、小判A160用、小判A161用、小判A162用、小判A163用、小判A164用、小判A165用、小判A166用、小判A167用、小判A168用、小判A169用、小判A170用、小判A171用、小判A172用、小判A173用、小判A174用、小判A175用、小判A176用、小判A177用、小判A178用、小判A179用、小判A180用、小判A181用、小判A182用、小判A183用、小判A184用、小判A185用、小判A186用、小判A187用、小判A188用、小判A189用、小判A190用、小判A191用、小判A192用、小判A193用、小判A194用、小判A195用、小判A196用、小判A197用、小判A198用、小判A199用、小判A200用、小判A201用、小判A202用、小判A203用、小判A204用、小判A205用、小判A206用、小判A207用、小判A208用、小判A209用、小判A210用、小判A211用、小判A212用、小判A213用、小判A214用、小判A215用、小判A216用、小判A217用、小判A218用、小判A219用、小判A220用、小判A221用、小判A222用、小判A223用、小判A224用、小判A225用、小判A226用、小判A227用、小判A228用、小判A229用、小判A230用、小判A231用、小判A232用、小判A233用、小判A234用、小判A235用、小判A236用、小判A237用、小判A238用、小判A239用、小判A240用、小判A241用、小判A242用、小判A243用、小判A244用、小判A245用、小判A246用、小判A247用、小判A248用、小判A249用、小判A250用、小判A251用、小判A252用、小判A253用、小判A254用、小判A255用、小判A256用、小判A257用、小判A258用、小判A259用、小判A260用、小判A261用、小判A262用、小判A263用、小判A264用、小判A265用、小判A266用、小判A267用、小判A268用、小判A269用、小判A270用、小判A271用、小判A272用、小判A273用、小判A274用、小判A275用、小判A276用、小判A277用、小判A278用、小判A279用、小判A280用、小判A281用、小判A282用、小判A283用、小判A284用、小判A285用、小判A286用、小判A287用、小判A288用、小判A289用、小判A290用、小判A291用、小判A292用、小判A293用、小判A294用、小判A295用、小判A296用、小判A297用、小判A298用、小判A299用、小判A300用、小判A301用、小判A302用、小判A303用、小判A304用、小判A305用、小判A306用、小判A307用、小判A308用、小判A309用、小判A310用、小判A311用、小判A312用、小判A313用、小判A314用、小判A315用、小判A316用、小判A317用、小判A318用、小判A319用、小判A320用、小判A321用、小判A322用、小判A323用、小判A324用、小判A325用、小判A326用、小判A327用、小判A328用、小判A329用、小判A330用、小判A331用、小判A332用、小判A333用、小判A334用、小判A335用、小判A336用、小判A337用、小判A338用、小判A339用、小判A340用、小判A341用、小判A342用、小判A343用、小判A344用、小判A345用、小判A346用、小判A347用、小判A348用、小判A349用、小判A350用、小判A351用、小判A352用、小判A353用、小判A354用、小判A355用、小判A356用、小判A357用、小判A358用、小判A359用、小判A360用、小判A361用、小判A362用、小判A363用、小判A364用、小判A365用、小判A366用、小判A367用、小判A368用、小判A369用、小判A370用、小判A371用、小判A372用、小判A373用、小判A374用、小判A375用、小判A376用、小判A377用、小判A378用、小判A379用、小判A380用、小判A381用、小判A382用、小判A383用、小判A384用、小判A385用、小判A386用、小判A387用、小判A388用、小判A389用、小判A390用、小判A391用、小判A392用、小判A393用、小判A394用、小判A395用、小判A396用、小判A397用、小判A398用、小判A399用、小判A400用、小判A401用、小判A402用、小判A403用、小判A404用、小判A405用、小判A406用、小判A407用、小判A408用、小判A409用、小判A410用、小判A411用、小判A412用、小判A413用、小判A414用、小判A415用、小判A416用、小判A417用、小判A418用、小判A419用、小判A420用、小判A421用、小判A422用、小判A423用、小判A424用、小判A425用、小判A426用、小判A427用、小判A428用、小判A429用、小判A430用、小判A431用、小判A432用、小判A433用、小判A434用、小判A435用、小判A436用、小判A437用、小判A438用、小判A439用、小判A440用、小判A441用、小判A442用、小判A443用、小判A444用、小判A445用、小判A446用、小判A447用、小判A448用、小判A449用、小判A450用、小判A451用、小判A452用、小判A453用、小判A454用、小判A455用、小判A456用、小判A457用、小判A458用、小判A459用、小判A460用、小判A461用、小判A462用、小判A463用、小判A464用、小判A465用、小判A466用、小判A467用、小判A468用、小判A469用、小判A470用、小判A471用、小判A472用、小判A473用、小判A474用、小判A475用、小判A476用、小判A477用、小判A478用、小判A479用、小判A480用、小判A481用、小判A482用、小判A483用、小判A484用、小判A485用、小判A486用、小判A487用、小判A488用、小判A489用、小判A490用、小判A491用、小判A492用、小判A493用、小判A494用、小判A495用、小判A496用、小判A497用、小判A498用、小判A499用、小判A500用、小判A501用、小判A502用、小判A503用、小判A504用、小判A505用、小判A506用、小判A507用、小判A508用、小判A509用、小判A510用、小判A511用、小判A512用、小判A513用、小判A514用、小判A515用、小判A516用、小判A517用、小判A518用、小判A519用、小判A520用、小判A521用、小判A522用、小判A523用、小判A524用、小判A525用、小判A526用、小判A527用、小判A528用、小判A529用、小判A530用、小判A531用、小判A532用、小判A533用、小判A534用、小判A535用、小判A536用、小判A537用、小判A538用、小判A539用、小判A540用、小判A541用、小判A542用、小判A543用、小判A544用、小判A545用、小判A546用、小判A547用、小判A548用、小判A549用、小判A550用、小判A551用、小判A552用、小判A553用、小判A554用、小判A555用、小判A556用、小判A557用、小判A558用、小判A559用、小判A560用、小判A561用、小判A562用、小判A563用、小判A564用、小判A565用、小判A566用、小判A567用、小判A568用、小判A569用、小判A570用、小判A571用、小判A572用、小判A573用、小判A574用、小判A575用、小判A576用、小判A577用、小判A578用、小判A579用、小判A580用、小判A581用、小判A582用、小判A583用、小判A584用、小判A585用、小判A586用、小判A587用、小判A588用、小判A589用、小判A590用、小判A591用、小判A592用、小判A593用、小判A594用、小判A595用、小判A596用、小判A597用、小判A598用、小判A599用、小判A600用、小判A601用、小判A602用、小判A603用、小判A604用、小判A605用、小判A606用、小判A607用、小判A608用、小判A609用、小判A610用、小判A611用、小判A612用、小判A613用、小判A614用、小判A615用、小判A616用、小判A617用、小判A618用、小判A619用、小判A620用、小判A621用、小判A622用、小判A623用、小判A624用、小判A625用、小判A626用、小判A627用、小判A628用、小判A629用、小判A630用、小判A631用、小判A632用、小判A633用、小判A634用、小判A635用、小判A636用、小判A637用、小判A638用、小判A639用、小判A640用、小判A641用、小判A642用、小判A643用、小判A644用、小判A645用、小判A646用、小判A647用、小判A648用、小判A649用、小判A650用、小判A651用、小判A652用、小判A653用、小判A654用、小判A655用、小判A656用、小判A657用、小判A658用、小判A659用、小判A660用、小判A661用、小判A662用、小判A663用、小判A664用、小判A665用、小判A666用、小判A667用、小判A668用、小判A669用、小判A670用、小判A671用、小判A672用、小判A673用、小判A674用、小判A675用、小判A676用、小判A677用、小判A678用、小判A679用、小判A680用、小判A681用、小判A682用、小判A683用、小判A684用、小判A685用、小判A686用、小判A687用、小判A688用、小判A689用、小判A690用、小判A691用、小判A692用、小判A693用、小判A694用、小判A695用、小判A696用、小判A697用、小判A698用、小判A699用、小判A700用、小判A701用、小判A702用、小判A703用、小判A704用、小判A705用、小判A706用、小判A707用、小判A708用、小判A709用、小判A710用、小判A711用、小判A712用、小判A713用、小判A714用、小判A715用、小判A716用、小判A717用、小判A718用、小判A719用、小判A720用、小判A721用、小判A722用、小判A723用、小判A724用、小判A725用、小判A726用、小判A727用、小判A728用、小判A729用、小判A730用、小判A731用、小判A732用、小判A733用、小判A734用、小判A735用、小判A736用、小判A737用、小判A738用、小判A739用、小判A740用、小判A741用、小判A742用、小判A743用、小判A744用、小判A745用、小判A746用、小判A747用、小判A748用、小判A749用、小判A750用、小判A751用、小判A752用、小判A753用、小判A754用、小判A755用、小判A756用、小判A757用、小判A758用、小判A759用、小判A760用、小判A761用、小判A762用、小判A763用、小判A764用、小判A765用、小判A766用、小判A767用、小判A768用、小判A769用、小判A770用、小判A771用、小判A772用、小判A773用、小判A774用、小判A775用、小判A776用、小判A777用、小判A778用、小判A779用、小判A780用、小判A781用、小判A782用、小判A783用、小判A784用、小判A785用、小判A786用、小判A787用、小判A788用、小判A789用、小判A790用、小判A791用、小判A792用、小判A793用、小判A794用、小判A795用、小判A796用、小判A797用、小判A798用、小判A799用、小判A800用、小判A801用、小判A802用、小判A803用、小判A804用、小判A805用、小判A806用、小判A807用、小判A808用、小判A809用、小判A810用、小判A811用、小判A812用、小判A813用、小判A814用、小判A815用、小判A816用、小判A817用、小判A818用、小判A819用、小判A820用、小判A821用、小判A822用、小判A823用、小判A824用、小判A825用、小判A826用、小判A827用、小判A828用、小判A829用、小判A830用、小判A831用、小判A832用、小判A833用、小判A834用、小判A835用、小判A836用、小判A837用、小判A838用、小判A839用、小判A840用、小判A841用、小判A842用、小判A843用、小判A844用、小判A845用、小判A846用、小判A847用、小判A848用、小判A849用、小判A850用、小判A851用、小判A852用、小判A853用、小判A854用、小判A855用、小判A856用、小判A857用、小判A858用、小判A859用、小判A860用、小判A861用、小判A862用、小判A863用、小判A864用、小判A865用、小判A866用、小判A867用、小判A868用、小判A869用、小判A870用、小判A871用、小判A872用、小判A873用、小判A874用、小判A875用、小判A876用、小判A877用、小判A878用、小判A879用、小判A880用、小判A881用、小判A882用、小判A883用、小判A884用、小判A885用、小判A886用、小判A887用、小判A888用、小判A889用、小判A890用、小判A891用、小判A892用、小判A893用、小判A894用、小判A895用、小判A896用、小判A897用、小判A898用、小判A899用、小判A900用、小判A901用、小判A902用、小判A903用、小判A904用、小判A905用、小判A906用、小判A907用、小判A908用、小判A909用、小判A910用、小判A911用、小判A912用、小判A913用、小判A914用、小判A915用、小判A916用、小判A917用、小判A918用、小判A919用、小判A920用、小判A921用、小判A922用、小判A923用、小判A924用、小判A925用、小判A926用、小判A927用、小判A928用、小判A929用、小判A930用、小判A931用、小判A932用、小判A933用、小判A934用、小判A935用、小判A936用、小判A937用、小判A938用、小判A939用、小判A940用、小判A941用、小判A942用、小判A943用、小判A944用、小判A945用、小判A946用、小判A947用、小判A948用、小判A949用、小判A950用、小判A951用、小判A952用、小判A953用、小判A954用、小判A955用、小判A956用、小判A957用、小判A958用、小判A959用、小判A960用、小判A961用、小判A962用、小判A963用、小判A964用、小判A965用、小判A966用、小判A967用、小判A968用、小判A969用、小判A970用、小判A971用、小判A972用、小判A973用、小判A974用、小判A975用、小判A976用、小判A977用、小判A978用、小判A979用、小判A980用、小判A981用、小判A982用、小判A983用、小判A984用、小判A985用、小判A986用、小判A987用、小判A988用、小判A989用、小判A990用、小判A991用、小判A992用、小判A993用、小判A994用、小判A995用、小判A996用、小判A997用、小判A998用、小判A999用、小判A1000用、小判A1001用、小判A1002用、小判A1003用、小判A1004用、小判A1005用、小判A1006用、小判A1007用、小判A1008用、小判A1009用、小判A1010用、小判A1011用、小判A1012用、小判A1013用、小判A1014用、小判A1015用、小判A1016用、小判A1017用、小判A1018用、小判A1019用、小判A1020用、小判A1021用、小判A1022用、小判A1023用、小判A1024用、小判A1025用、小判A1026用、小判A1027用、小判A1028用、小判A1029用、小判A1030用、小判A1031用、小判A1032用、小判A1033用、小判A1034用、小判A1035用、小判A1036用、小判A1037用、小判A1038用、小判A1039用、小判A1040用、小判A1041用、小判A1042用、小判A1043用、小判A1044用、小判A1045用、小判A1046用、小判A1047用、小判A1048用、小判A1049用、小判A1050用、小判A1051用、小判A1052用、小判A1053用、小判A1054用、小判A1055用、小判A1056用、小判A1057用、小判A1058用、小判A1059用、小判A1060用、小判A1061用、小判A1062用、小判A1063用、小判A1064用、小判A1065用、小判A1066用、小判A1067用、小判A1068用、小判A1069用、小判A1070用、小判A1071用、小判A1072用、小判A1073用、小判A1074用、小判A1075用、小判A1076用、小判A1077用、小判A1078用、小判A1079用、小判A1080用、小判A1081用、小判A1082用、小判A1083用、小判A1084用、小判A1085用、小判A1086用、小判A1087用、小判A1088用、小判A1089用、小判A1090用、小判A1091用、小判A1092用、小判A1093用、小判A1094用、小判A1095用、小判A1096用、小判A1097用、小判A1098用、小判A1099用、小判A1100用、小判A1101用、小判A1102用、小判A1103用、小判A1104用、小判A1105用、小判A1106用、小判A1107用、小判A1108用、小判A1109用、小判A1110用、小判A1111用、小判A1112用、小判A1113用、小判A1114用、小判A1115用、小判A1116用、小判A1117用、小判A1118用、小判A1119用、小判A1120用、小判A1121用、小判A1122用、小判A1123用、小判A1124用、小判A1125用、小判A1126用、小判A1127用、小判A1128用、小判A1129用、小判A1130用、小判A1131用、小判A1132用、小判A1133用、小判A1134用、小判A1135用、小判A1136用、小判A1137用、小判A1138用、小判A1139用、小判A1140用、小判A1141用、小判A1142用、小判A1143用、小判A1144用、小判A1145用、小判A1146用、小判A1147用、小判A1148用、小判A1149用、小判A1150用、小判A1151用、小判A1152用、小判A1153用、小判A1154用、小判A1155用、小判A1156用、小判A1157用、小判A1158用、小判A1159用、小判A1160用、小判A1161用、小判A1162用、小判A1163用、小判A1164用、小判A1165用、小判A1166用、小判A1167用、小判A1168用、小判A1169用、小判A1170用、小判A1171用、小判A1172用、小判A1173用、小判A1174用、小判A1175用、小判A1176用、小判A1177用、小判A1178用、小判A1179用、小判A1180用、小判A1181用、小判A1182用、小判A1183用、小判A1184用、小判A1185用、小判A1186用、小判A1187用、小判A1188用、小判A1189用、小判A1190用、小判A1191用、小判A1192用、小判A1193用、小判A1194用、小判A1195用、小判A1196用、小判A1197用、小判A1198用、小判A1199用、小判A1200用、小判A1201用、小判A1202用、小判A1203用、小判A1204用、小判A1205用、小判A1206用、小判A1207用、小判A1208用、小判A1209用、小判A1210用、小判A1211用、小判A1212用、小判A1213用、小判A1214用、小判A1215用、小判A1216用、小判A1217用、小判A1218用、小判A1219用、小判A1220用、小判A1221用、小判A1222用、小判A1223用、小判A1224用、小判A1225用、小判A1226用、小判A1227用、小判A1228用、小判A1229用、小判A1230用、小判A1231用、小判A1232用、小判A1233用、小判A1234用、小判A1235用、小判A1236用、小判A1237用、小判A1238用、小判A1239用、小判A1240用、小判A1241用、小判A1242用、小判A1243用、小判A1244用、小判A1245用、小判A1246用、小判A1247用、小判A1248用、小判A1249用、小判A1250用、小判A1251用、小判A1252用、小判A1253用、小判A1254用、小判A1255用、小判A1256用、小判A1257用、小判A1258用、小判A1259用、小判A1260用、小判A1261用、小判A1262用、小判A1263用、小判A1264用、小判A1265用、小判A1266用、小判A1267用、小判A1268用、小判A1269用、小判A1270用、小判A1271用、小判A1272用、小判A1273用、小判A1274用、小判A1275用、小判A1276用、小判A1277用、小判A1278用、小判A1279用、小判A1280用、小判A1281用、小判A1282用、小判A1283用、小判A1284用、小判A1285用、小判A1286用、小判A1287用、小判A1288用、小判A1289用、小判A1290用、小判A1291用、小判A1292用、小判A1293用、小判A1294用、小判A1295用、小判A1296用、小判A1297用、小判A1298用、小判A1299用、小判A1300用、小判A1301用、小判A1302用、小判A1303用、小判A1304用、小判A1305用、小判A1306用、小判A1307用、小判A1308用、小判A1309用、小判A1310用、小判A1311用、小判A1312用、小判A1313用、小判A1314用、小判A1315用、小判A1316用、小判A1317用、小判A1318用、小判A1319用、小判A1320用、小判A1321用、小判A1322用、小判A1323用、

夏の手紙

集詩

北園克衛

刊

房書イオア

北園克衛の詩を恩地孝四郎が担当して挿絵・構成したものです。無綴じでありながらも天地小口の三方にクロームが塗られた、類例を見ない瀟洒な装いです。タイトルは恩地の書き文字によります。本文は写植で二六ポイント（当時の写植はポイント制でした）平体一番のMMOKSの原形の書体です。組版は志茂によるものですが、精度の低かった写植機を駆使して和欧混植やルビ付きなどの高度な組版もこなしています。印刷部数は二〇〇部で初期の写植使用例としても貴重な資料です。（昭和二十二年九月）

夏の夜

Cher ami

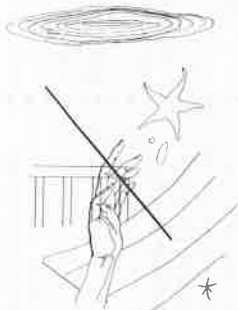
月華が咲くヴィラの庭でメロンを食べよう

どんなに愉しい決れのときが

僕たちにやつて来ることだらう！

山の端に月が出ると

海は一枚のレコードのやうに光った



志茂は膨大な量の手紙を残しましたがその多くは和文タイプライター・写植・活字によっています。ですから私信なのか公刊を目指したものなのか、はっきりしないものもあります。また誤字・脱字などは一向に意に介さない人の中では微笑ましいものも見られます。疎開の時に両国駅で貨車一両分の資料を焼失しましたが、昭和18年からあとの資料は自らファイルして現存しています。

志茂が選んだ方策とは、自らが文字組版を行なって印刷のすべての工程に関わって造る、小部数の美装本造りの途でした。それはまた趣向をとにもする、少数の会員によってのみ支えられることを始めから覚悟する、強い意志をとまなうものでもありました。

活字好きとはいえ、志茂は誌面に印圧の痕跡がみればいいといった幼ない「活字喰い込み派」ではありません。ケルムスコット・プレスやダブス・プレスを十分学んだうえでのタイポグラフィへの指向のつよい人でした。

そんな志茂が文字組版システムとして、金属活字や和文タイプライターとともに興味をよせたのが、誕生間もない写真植字機でした。昭和九年の暮れ、オート三輪車につまられた写真植字機が中野の伊勢元酒店の前につけられました。降り立ったのは写真植字機研究所（現写研）の石井茂吉社長でした。

昭和元年に研究所を設立して、海軍水路部・旧満洲関東軍や、秀英舎・日清印刷（いずれも現大日本印刷）・共同印刷・凸版印刷などの大手印刷所が試験的に使っていた写真植字機を、酒屋のオヤジが買おうというのですから、石井茂吉も期待半分、不安半分で納入に立ちあつたようです。

そもそも戦前の写真植字版の使用例をみることは極めて稀なことです。その大半はその軽便さと省資源性から軍部が使っていたために、資料が残らなかったとされます。

しかしたつたひとつの例外が「アオイ書房」の美しい刊行物になりました。そしてその文字組版はもちろん、執筆・編集・校正・渉外・通信販売までの一切をやったのが、志茂太郎というこ

とになるのです。

*

いずれ稿を改めて志茂太郎とアオイ書房の書物、さらにはこの国のプライベート・プレスについて書いてみたいと思いますが、ともかくこのひとの資産とは半端なものではありません。山の城の住所に番地が無かったことを想起してください。田園調布にも壮大な屋敷を残しています。つまりこの人は零細出版社のひとつやふたつを買収する程度の資金は雑作もない人だったのです。

間口が一〇メートルもある豪壮な志茂邸の庭に立って考えたことがあります。

（こんなところでひとり活字を組んで写真植字機を操作していたのか。志茂老人、ワープロやパソコンがまにあつたら狂喜しただろうな……そして渋い顔でひとくさり、搭載された活字の批評を語つただろうに……）

志茂は活字が書物の始まりであり、そのすべてであることを認識していました。印刷や製本は他人の手に任せても、文字組版だけは終生手放しませんでした。

書籍形成法つまりタイポグラフィとは活字に始まって活字におわるのです。だから「星と錨と顔と鬮」を懼れてみんなが口を閉ざす中であつて、活字を「変体活字」と蔑視したり、それを廃棄・換金しようとする企みに激昂したのです。

志茂はことばと活字という武器をもっていました。そして決然として「天人ともに許さざる極

悪非道のおこない」を糾弾する一文を発表したのです。強権をもってなる官憲でさえこんな志茂を東京から放逐するのに三年もかかっています。志茂の生涯の伴侶であり武器でもあったのは活字だったのです。

水面下でおこなわれた活字を襲った暴挙

そもそも変体活字や変体活字廃棄運動とは、いったいなんだったのでしょうか。この運動は東京橋・正進社印刷所社主の高橋興作が、昭和一三年来しきりに提唱したものでした。

この運動が勢いづいたのは、昭和一五年の「七・七禁令」つまり「贅修品等製造販売規則」の公布からで、高橋は金属活字も「度をすぎたぜいたく・おごり」の対象に加えて、印刷会社の所有する「変体活字」を一挙に廃棄・処分しようと計ったのです。

高橋の主張では「七・七禁令」にかんがみ、まず明朝体と角ゴシック体の本文用サイズの活字をのぞいて、オーナメント(花形活字)を含むすべての活字を「印刷会社の死蔵する変体活字」と呼びました。

そしてこれらの変体活字を廃棄して活字地金を活用し、しだいに激しさをます資材難に対処するとともに、工場内を整理して操作性を増して経済性を高め、印刷物からぜいたくを追放しようとしたものでした。

高橋はその趣旨を、昭和一五年九月一日の東京印刷同業組合活字規格統制委員会に「変体活字廃棄のための私案」として提出しました。

同委員会はそれに若干の修正を加えてつぎのように決議しています。

廃止決定…行書体・隸書体・草書体・楷書体・宋朝体・丸ゴシック体・花文字
期限付廃止…清朝体(三カ年の期限をもって廃止)
存続決定…正楷書体・角ゴシック体・明朝体

同業組合の決議は翌日ただちに招集された東京活版印刷工業組合臨時総代会に上提されましたが「甲論乙駁はてしなく、理事会に一任する」と記録されています。

その議事録によると、同業組合などに非加入の業者に仕事を奪われないように、強権を付すために政府の告示発令を求めていくこと。また全国一斉に実施して、しかも印刷業者だけではなくて、活字鑄造・販売業者もまきこんで、変体活字をとにかく一斉に追放すべきだとする発言が多々みられます。

そこには活字書体は貴重な文化資産だから保護すべきだとの発言は数行しか見られません。また一任された理事会がどんな結論をだしたのかの記述はまったくありませんし、政府からのそれらしき告示もありません。

とても不思議なことですが変体活字廃棄運動の記録は、昭和一五年九月の東京活版印刷工業組合の臨時総代会を最後に途絶えています。まれに地方の組合史などで「東京での決議をうけて変体活字の一斉廃棄処分を決定」とした記事を散見するだけになります。変体活字廃棄運動は記録から姿を消して、地下深く潜行したのです。

じつはわたしはこのテーマを四年ほど前に、印刷の専門誌に書いたことがありました。その反響のうちで興味深かったのが、この運動の実態は「廃棄」ではなくて「売却処分」だったとする複数の古老のはなしでした。ある老人は重い口調で語りました。

「ちようど召集解除で家にいたんだけどね、予告もなにもなくいきなりだったよ。三輪車でカマスもってきて……金を握らせんだよな。こう袖の下からそと渡すみたいに。どうなってんだかわかんねえし。五号と九ボシが残ってなかったなあ……活字がなきや仕事もできねえし、なんかやる気もなくなつてさあ、恥ずかしいはなし吉原に直行したよ。十日も流連いっつけたかな。それでも金は結構余ったかな。オヤジにでかく怒られたさ。エッだれがもつてった、書類か……それがよくわからねえんだ。噂じや御徒町辺りのクズ屋らしいってことだけどね。重さなんか計っちゃいないさ。現金貰ってんだから書類もないさ。やつと帰還したら工場も丸焼でさあ、なんにも残っていないよ」

志茂の一喝をよそに「非常時のお国のため」の美名のもと、ことは内密に巧妙に陰湿におこなわれていきました。

廃棄命令の出所はどこなのか、実行は誰の手によったのか、活字はどこに消えたのか、いっさいはいまだに霧の彼方にかすんでいます。

ある日突然屑鉄業者の三輪車が横付けされて、印刷工場の「変体活字」はいっせいにカマスに投げいられました。とりわけ目の敵にされたのが、本文用明朝体のルビ付き活字だったといいます。ようやく買そろえたばかりの膨大なルビ付き活字はどういう訳か真つ先にもちさらされました。

活字がどこに何に消えるのか解らなかつた。要らざることには関わらない風潮もあった。そして渡された紙幣は素早くしまいで、すべてを忘れたかつたといひます。印刷業者の誇りは地にまみれ、良心のどこかが痛かつたともいひます。

ときおり廃棄に応じない業者がいるとすぐに組合幹部が押しかけて、悪鬼羅刹の形相で「非国民」とののしりました。それでも肯んじなければ、特高の刑事が夜更けにひっそり訪れたといひます。

否も応もなく従わざるを得なかつたのが「国民運動としての変体活字廃棄運動」だったのです。この運動は本当に資源が枯渇した戦争末期に展開された訳ではありません。「変体活字」はあらかた昭和一七年のはじめには姿を消しています。そこがいちばんつらいところなのです。

ここでおきがちな疑問は、戦争中には街角の銅像や寺の鐘や鍋釜まで供出したではないかという疑問です。しかし政府が資源回収のために金属回収令第六条を強化して、神社・寺院・教会な

どの鉄・銅製品の供出を命じたのは昭和一七年五月九日のことでした。「変体活字廃棄運動」はそのころにはあらかた終わりを迎えていたのです。その後空襲の被害などがかさなって「変体活字廃棄運動」の暴挙は歴史の闇のなかに姿を消していきました。

皮肉なことこれらの活字は、近代印刷発祥の地・東京築地活版製造所跡のビルに集められました。そして昭和二〇年の空襲により、おびただしい量の活字が滝のように溶けて流れだし歌舞伎座の裏の築地川を埋めたということです。

活字文化の復活をめざすみち

資料がすくない活字版印刷業者にたいして、悲しいことですが金属活字鑄造業者はより私利私欲に走った形跡が濃厚にうかがえます。活字鑄造母型のマテ材は無垢の銅や真鍮だったために驚くほどの高値で売却されました。

もともとは関西がその中心でした。井原西鶴も近松門左衛門も上方で活躍しましたし、大阪は出版・印刷の町だったのです。江戸はむしろ行政の町であり職人の町でもありました。

昭和初期の活字界でも関東大震災の傷が癒えなかつた東京築地活版製造所はともかく、そう新書体の開発に熱心だったわけではありません。志茂の遺品を見ても、明朝体やゴシック体は東京系の活字ですが、宋朝体・龍宋朝体・篆書体・草書体などの関西系の活字も沢山所蔵していまし

た。つまりは「変体活字」だらけでもあったのですが……。

ところが活字一本何銭という取引きが「阿呆クサ」くて関西を中心に、明朝体をふくむすべての母型を売却処分した業者がみられるのはとても残念なことです。

さらにはその後の発注をきらって、活字見本帳まで意図的に回収して処分しました。とても残念で悲しい記録を一部の活字鑄造所にみることができます。

活字にくらべると母型とはそうかさばるものではありません。まして関東大震災の罹災から学んで、業者はそれを「母型箆筒」とよぶ頑丈な耐火金庫に収納するのが普通でした。空襲警報もありましたし防空壕も掘っていました。貴重な資材は疎開もしたはずです。活字の母型は本当に戦禍に消えたのでしょうか。

名古屋の活字鑄造所・津田三省堂の記録『本邦活字五十年史』（津田太郎遺稿未刊）には、執拗に「当社は焼夷弾の直撃によって甚大な被害があった」と記されています。うっかりすると見落としがちな記述です。しかし何度となくこの記述にふれて、同社の戦後の新活字彫刻への苦難の道と照らし合わせると、意外な思いがそこに伏せられていることが解ります。

この記録を残したのは二代目社長・津田太郎ですが、焼夷弾の直撃のために「防空壕の中に置いていた母型箆筒」すら変形してしまったのが津田三省堂でした。そして言外には戦禍のためではなくて、変体活字廃棄運動に便乗して母型を売却した業者があったことを暗に伝えていたのです。読書人の津田太郎はこうして言外に万感の思いをこめて記録したのかもしれない。

戦前に成功していた関西発の書体がまま命脈を断っていたり、安易に写植・電子活字として解放されていたり、なにより戦後に復旧できなかった理由は意外なところに潜んでいます。そして複数の出版社・新聞社・印刷所などが戦後にその軸足を東京に移したことも「変体活字廃棄運動」と決して無縁ではありません。

活字とは生きていますし、いまなお日々の書き足しや修整が求められます。活字鑄造所がたんなる東京の活字の販売店になったのでは、高度な印刷の需要を満たすことができません。戦後の大阪が商都としての性格をより強めて、情報の発信に乏しく見えるのも、もしかすると活字を失ったことが原因のひとつとなって、メディアがこの町を去ったためかもしれません……。

どこかで黒くておおきなちからが動いていました。みんなが寡黙になり、おもい沈黙が業界を覆いました。商工省などの官僚による統制がますます露骨になるのは、昭和一七年の後半からになります。官僚は「変体活字廃棄運動」のようなある意味での粗雑で強引な手法ではなく、より巧妙で精緻でした。

業界誌に「活字印刷物の可読性に就て」「印刷改善と視力保護」というすぐれた論文が掲載されました。研究者に悪意があったとは思えません。しかし官僚はこの論文を見逃さずに「学童小国民の視力衛生に悪影響のある小さな活字」、すなわち少年航空兵の機銃操作に支障があるとして、六号以下の活字とルビ活字廃止の有力な論拠として利用しました。

金属活字にとって最後のとどめは、昭和一九年「印刷企業整備要綱」によるもので、業者の三

分の二が強制廃業に追い込まれることになりました。しかもその作業は「印刷連合会」に命じられて、官僚はけっして手を汚すことはありませんでした。

そして敗戦時に残った全土の印刷業者の数は三三五六社、戦前のわずかに一八パーセントでした。そこに残された活字はまことに貧弱なものでした。しかも失われた活字の多くが空襲や火災によって失われたものではなかったのです。

「お国のため」という美名から出発した一部の業者の私欲は、この国の金属活字史に癒すことができない打撃をあたえました。しかもすべては戦争という暴挙のなかに埋没していったようにみえます。そしていま、あまりに軽やかに「フォント」とよばれるようになったこの国の言語表記システムは、安住の地を得ているのでしょうか。

敗戦からの復興はめざましいものがありました。印刷の需要も旺盛でした。しかし貧困な活字のストックだった印刷業界は、競って活字の母型を購入して社内鑄造機で活字を鑄造する「自家鑄造」に走りました。印刷業者や母型業者は普通「活字書体の専門家」ではありません。その分鑄造業者の地位が低下して母型製造業者は繁忙をきわめました。幸運なことに開発者の名をとって「ベントン」と呼ばれた「機械式活字母型(父型)彫刻機」が国産化されて、ときには粗製濫造と誇りをうけるような活字も誕生しました。

まるでバラックのような活字……。戦後文化にはそうした一面も軽視できません。口の悪い志茂はすかさず酷評をあびせています。

「初号と五号の原字がおなじとは、あんなものは活字とはいえない。インチキな代物にすぎず、早晩消えてなくなるしかないものである」

はたして志茂の予言は……。

昭和二年四月当用漢字一八五〇字が決定し、新かなづかいが公告されました。その付則にひっそりと「ルビはもちいない」とありました。印刷業者は必ずしもルビは歓迎しません。当然膨大にあったはずのルビ付き活字はよみがえりませんでした。そのせいもあるのでしょうか……、漢字を読めない層がふえています。それはまま教育のせいにされますが、昔もそう漢字教育が盛んだったとは思えません。意外に書物からルビが姿を消したことが影響しているのかもしれない。

官庁用語にも口語文が採用されて、昭和二三年に当用漢字音訓表ならびに当用漢字別表が公表されて、漢字の字体にも法が介在するところとなりました。そもそも漢字の字体は昭和一〇年頃からかまびすしい議論が続いていましたが、このガイドダンスはガリ版刷りのきわめてあいまいで粗悪なもので、戦後の混乱期でもなければとても考えられない雑駁なものでした。しかし各社は競ってそれとの字体の整合にはしり、「当用漢字対応の新製品」として販売を強化しました。その蔭でふるい活字はふりむきもされませんでした。

この字体表は今日なお有形・無形の影響を漢字の字体にあたえています。それゆえにこの国の漢字の字体は常に混乱のきわみにあります。

たしかに昭和初期にはちいさな民族主義や皇国史観がみられました。軍国主義が跋扈していたのも事実でした。そして戦いに敗れてもお国体護持という虚構にはしつたため、戦前、とりわけ昭和期前半を水に流さざるをえないこの国の傾きがあるのかもしれない。しかし戦前のすべてを切り捨てて、まっとうな批評や評価をしないという風潮は好ましくありません。

活字と書物にはどんなに戦火が激しかろうとも、それをしのぎきる強靱さとしなやかさがあります。つまり志茂太郎の造った書物がここに残り、そして貴重な歴史の記録として残りました。書いて組んで残す、タイポグラフィの凄みとはそこにあります。

どんなに隠蔽しても「変体活字廃棄運動」という蛮行は次第にあきらかになりつつあります。志茂は書物を通じてふたたび活字を「変体」などと呼んで軽視してはならないと警告したのかも知れません。

文字や活字には権力者が異常なまでの執着をみせるという認識が、この国にはどうも薄いようにみうけます。秦の始皇帝・ナポレオン・ヒットラーでも挙げればいでしょうか……。

つまり金属活字であろうと写植活字であろうとあるいは電子活字であろうとも、規格とか統一・統制ということばがその周辺に飛びかうとき、必ずしも幸せとはいえない時代を迎えるのが歴史の教訓でした。いまも「変体活字廃棄運動」に連なる黒い手は、活字の周辺で埋み火のようにひっそりと身をひそめているのかもしれない。

志茂太郎は戦後ついに「汚濁まみれの役人が跋扈する東京」にもどることなく、郷里山の城の

豪壮な屋敷にあって「日本愛書会」「日本書票協会」を主宰して書物を造りつづけました。そして波乱に満ちた生涯を、アオイの花にかこまれて穏やかにまっとうしました。その遺品のなかにはもはや東京ではみることもできない名門鋳造所の金属活字が、にぶい鉛のひかりを放って立ちならんでいます。この人は最後まで活字と書物を愛する人でした。

志茂太郎、昭和五五年九月二日没。行年八一歳。法名浄賢院仙岳良通居士。雄大な中国山脈のぞむ山の城私邸内志茂家の墓地にねむる。



晩年には次男実の病院の薬袋を造るのが楽しみで30種ほどが残っています。挿絵は腰の抜けるほど貴重な版画を無造作に使っています……。



27

published: robundo publishing inc.
edited: togaro junji
shot: masaki nakashima
basic design: akira yoshida
typesetting: ryo omigae

朗文堂 160-0022 東京都新宿区新宿2-4-9
telephone 03 3352 5070 facsimile 03 3352 5859

058

MAY 1998

文字百景

活字に憑かれた男たち (二)

變體活字廢棄運動と志茂太郎

片塩二郎

robundo publishing

058